

ココ

1、ココとの出会い

ココは、ゴミ捨て場に捨てられていました。
ビニール袋に入れられて。

ある朝、かななぎさんちのおかあさんがゴミを出しにいくと、ゴミ袋が山のようにいっぱい重なっているところで、ゴソゴソと動くものがありました。

何だろうと思ってよく見ると、小さなごみ袋の中で動いているものがあつたのです。
拾い上げると、その中に四匹の赤ちゃん猫が入っていました。

ゴミ捨て場に生まれたばかりの赤ちゃん猫を捨てる人がいたのです。

かななぎさんちのおかあさんは赤ちゃん猫をそのままにしておくことができず、拾って家に帰りました。

2、かななぎさんちのねこたち

そのとき、かななぎさんちには、チビとヒミコという二匹の猫がいました。

そこに四匹の赤ちゃん猫が増えました。

町の獣医さんは、四匹の赤ちゃん猫を診て、「育つのは難しいよ」と言いました。
一匹の雄猫は、獣医さんが言った通り、拾われて来て二日目に死んでしまいました。

残った雄猫にはリーキーという名前を付けました。
雌猫二匹は、モモとココという名前が付けられました。

赤ちゃん猫はみなそれぞれに目に病気がありました。
キジトラ模様のリーキーの右目は白濁していました。
モモは左目がまっ白でした。
そして、ココには生まれつき眼球そのものがありませんでした。

かななぎさんちのおかあさんは、三匹の赤ちゃん猫にいっしょうけんめいスポイトでミルク

クを飲ませましたが、一番元気に動き回っていたリーキーが死んでしまいました。

かななぎさんちのひとりっこのたっちゃんは、「ぼくのおとうとだとおもっていたのに」と、リーキーが死んで泣きじゃくりました。

最後の手段と、かななぎさんちのおかあさんは、母猫代わりにノラ猫を拾ってきて、ママハハ猫になってもらい、子育てを手伝ってもらいました。

そのママハハ猫をマリコと名づけました。

マリコはかいかいしくモモとココの面倒をみました。

かななぎさんちの猫たちは七匹に増えました。

でも、そのおかげで、かななぎさんちの子育て作戦は成功し、片目が半濁しているモモは知り合いのおどりをおどる人にもらわれていきました。

そして、十七歳四ヶ月になるまで、とてもしあわせにくらすことができました。

3、ココ

ココには生まれつき、目玉がありませんでした。

だから、まったく目は見えません。

でも、家の中のいろいろな物にほとんどぶつかることなく過ごすことができました。

ひげで物の気配を探知するのか、蝙蝠のように音の反響で物の所在がわかるのか、よくわかりませんが、ぶつかることなく動けました。

全力で走りたい時には、グルグルと円周を描くように動きました。

全速力で円運動してもそこには妨害するものはありませんから、力いっぱい走ることができたのです。

でも、ココにはときどき発作が起こりました。

何の前触れもなく、突然、五〇センチくらい跳ね上がり、痙攣するのです。
からだぜんたいとピクピクふるわせながら、跳ね上がるのです。

かななぎさんちのおかあさんはどうすることもできず、見守るしかありませんでした。

しばらくすると発作が収まります。

おかあさんはやさしくからだを撫でさすります。

ママハハ猫のマリコも白と茶色と黒のココの毛をなめます。

一週間に一度は、そんな発作が突然起こるのです。

そのとき、きまっておしっこをもらすのでした。

かななぎさんちのおかあさんは、いつもきれいにココのねどこやトイレをととのえました。

獣医さんの診察では、それは猫のてんかんだそうです。

4、ココの教え

ココは目が見えません。

でも、それほど生活には困りませんでした。

音と匂いと気配に敏感に反応しながら、自分の世界をつくっていました。

ココは、かななぎさんちのおかあさんやおとうさんやたっちゃんにとってもやさしく育てられたので、警戒するということをまったく知りませんでした。

家に他の猫が遊びに来たりしても、まったく相手を気にせず、すりすりとしり寄り寄っていきます。

相手の大きな猫が警戒して、「うう〜ッ」とうなって威嚇しても、気にすることなく、恐れることなく、近づいていくのです。

すると、相手の方がたじたじとなって、唸りながらずるずる後ろに下がって、警戒心を解きません。

それでもかまわず、まったく警戒せずにココは近づいていき、いつしかからだをくっつけてなかよくいっしょにすやすやと眠っているのです。

その様子を見て、かななぎさんちのお父さんは感動してしまいました。

なんて、平和な光景なのだろう！

どうしてこれほどみんなと仲良くできるのか！

かななぎさんちのお父さんは哲学や芸術を研究している大学のせんせいです。

そのココちゃんのまったく警戒することも威嚇することもしないすがたを見て、お父さんはココちゃんを「平和の使徒」「天然のタオイスト」と名づけました。

哲学者なので、むつかしい言い方をしていますが、警戒するところをときほぐし、おのずとみんなにあんしんの気持ちを起こさせて平和を生み出し、なかよくなる、という意味だそうです。

要するに、みんながいっしょに、たのしくなって、ニコニコしたり、しずかでやすらかなきもちになったり、しあわせを感じたりするってこと。

かななぎさんちのお父さんは、ココちゃんのその平和主義とタオイストぶりをいろいろなところでねっしんに話しました。

そんなココちゃんはみんなに好かれました。

かななぎさんちのお父さんが東京から京都の大学に移ることになって、一緒に京都に行く時も、新幹線の中でもすやすやとかごの中でよく眠り、一度も騒ぐことなく、みんなにほんとにいい子ねとほめられました。

ココちゃんは比叡山の麓の家で、ゆっくりと過ごすことになりました。

かななぎさんちのおかあさんは、よくココちゃんをあかちゃんひもにくるんで、胸元にだっこして、比叡山のふもとのお寺やお宮をお参りました。

そんなときも、ココちゃんはうれしそうにグルグル、ゴロゴロとのどをならして楽しんでいるようでした。

かななぎさんちのお父さんは、わが家の神さまはココちゃんです、ココちゃんはわが家の観音様です、大天使です、とあちこちで言いふらしていました。

ココちゃんは、かななぎさんちにしあわせをもたらしました。

5、ココちゃんの死

十七歳と十ヶ月、姉妹猫のモモちゃんが亡くなってしばらくして、ココちゃんは、かななぎさんちのおかあさんが見守るなか、安らかに眠りにつきました。

かななぎさんちのおとうさんは庭にお墓を作り、そのまえでうたをうたっていたのりました。

ココちゃん、ありがとう。ココちゃん、いつまでもやすらかに。

わすれないよ、ココちゃんのこと。いつもいっしょだよ。

かななぎさんは、いつもココちゃんのお墓に語りかけます。

ココちゃんはいつもしずかにほほえんでくれます。

かななぎさんちのみんなはそうかんじています。